

## 大叔母の口癖

私の大叔母の口癖は「何でも買ってあげる」である。御歳 90 歳になる大叔母は子供好きで、しかし子供に恵まれず、姪の娘にあたる私を昔からよく可愛がってくれた。年齢を重ね、認知症を発症してからもそれは変わらず、会う度に「今度一緒にお買い物に行こう。何でも好きなものを買ってあげる」と微笑むのだ。会う度同じ言葉を何度も何度も言う大叔母の姿に少々呆れつつも「認知症だから仕方ない」と思い「ありがとう、楽しみにしているね」と返すことが恒例となっている。そうすると大叔母はまた嬉しそうに手をパチパチと叩きながら微笑むのだ。

そんな会話を続けて 10 年以上たち私が看護学生になったある日、私はふと「認知症とはなんだろう」と考えるようになった。そのきっかけは、母が大叔母に「去年お正月にみんなと集まったこと覚えてるけ？」と聞いたことである。私の母は医療従事者であるため認知症についての理解が深く、大叔母の状態を知る為にこのような認知度の確認をよく会話に取り入れていた。幼い頃はそれについて何とも思っていなかったのだが、看護学生になりその会話が認知度の確認だと気付いた私はそれとなく大叔母の表情を観察してみた。眉間に皺を寄せ唇をきゅっと結び小首を傾げるような動作。目は開いているけれど、焦点を失ったような空虚な眼差し。「困惑」「焦燥」。あの時の大叔母の表情を表すのにこれ以上の言葉を私は知らない。そして次の瞬間大叔母は私の方に顔を向け「私この子に何か買ってあげたいんだよ」といったのだ。「ああ、これは恐怖か」と思った。

「人はいつ死ぬと思う？人に忘れられた時さ」尾田栄一郎氏原作の漫画 ONE PIECE にこのような一節がある。では、自分で自分を忘れた時はどうだろう。周りが自分の知らない自分を語りだしたら。そう考えると怖くて冷や汗が出た。急に宇宙空間にでも放り投げ出されたような気がした。生きた心地がしなかった。そして最後に求めたのは安心感だった。だからこそあの時大叔母は自分の知る自分を私に肯定して欲しかったのではないだろうか。それこそが今の彼女にとっての生きた証で存在証明なのだから。このことは認知症患者に限ったことでは無い。それまで生活・信念それに伴う人間関係や健康管理方法・治療…それら自分の積み重ねてきたものを否定されて嬉しい人などいない。はっきり肯定はできなくとも頷き傾聴するだけで人は安心できると大叔母との関わりあいの中で学んだ。私はこの時、将来患者さんの過去を肯定できる看護師になりたいと強く思った。

現在、認知症が悪化した大叔母の記憶に私はいない。以前私だけに向けられていた「何でも買ってあげる」という言葉は今や大叔母の代名詞。会う人会う人に言っているようだ。それでもその笑顔が私に向けられた時、私はいつものように「楽しみにしているね」と笑うのだ。